浮世草子 新版 戀花曽我 第三編 巻之中

江戸

松亭金水 編次

第八回

却説白藤源次郎は、そもそもいかなるものぞやすでに八門左の両個を傷ることをなすまじきと、その初終を知らざるゆえ、かの一刀を揮ふるとしぬるまでも、入魂なりしかども、其実は左にあらず。其実は左にあらず。其実は左にあらず。

なりて、あくる朝、眼のさめ
まもなく、やうやく二人の寐
かたより、両個のかたへ寐
まんぢう、その晩言も。裏
もの。源作が自
まで。源作

まる鼻紙やう二つ三つもち。その外さしぐすくもち。その外薬ばこ。その外楊枝。その外ふところ鏡。その外櫛。その外ゆかたびら。その外ねまきなどもたせ。

中ぜんにて二人も三人も毎日毎晩かならずよもあるべきやうにて。

さてまた三人の者ども。ふだんはいかやうにしてくらすぞ。

朝ごとに。

飯ぜんにて。

飯ぜんにて。

飯ぜんにて。

さてまた三人の者ども。ふだんはいかやうにしてくらすぞ。

朝ごとに。

飯ぜんにて。

飯ぜんにて。

飯ぜんにて。

よく考えて居ても。(かんがえ)
とうも(とう)
すこし宅を(うち)(で)
よごれよう。(よごれ)
ゆびさき(ゆび)
めん
梅どるよう(うめ)
ぢよきち(じょきち)
ものへ。何(なに)
ぢえる(じえる)
具わさん(ぐ)
あかこそんとそ(あか)
それて美し(それ)(うつく)
まんぢう(まんじゅう)
方一冷まし(ほう)(ひと)(ひや)
ひとの(ひと)
ぢう(じゅう)
ぢう(じゅう)
ぢう(じゅう

初めまあ。すまあ。お客さんも若旦那のあ
まあ。どこ。ここよ。伺ってお邪魔でござ
ますわ。いえ。ちっとも。さあさあ。どうぞ
こちらへ。ようこそ。お久しぶりでございま
すこと。ほんとに。一日も早くお目にかかり
たいと存じておりましたの。さあさあ。どう
ぞ。そうそうそうなさいまし。ほんとに。
ちっとも。お構いなくって。ほんとに。
まあ。すまあ。お客さんも若旦那のあ
まあ。どこ。ここよ。伺ってお邪魔でござ
ますわ。いえ。ちっとも。さあさあ。どうぞ
こちらへ。ようこそ。お久しぶりでございま
すこと。ほんとに。一日も早くお目にかかり
たいと存じておりましたの。さあさあ。どう
ぞ。そうそうそうなさいまし。ほんとに。
ちっとも。お構いなくって。ほんとに。

うつくしのものゝ。おもふ男をとかけるまことの女ハイくさおめんるまこゝろ。せくしきよう
のみ。仙見よりのぞくをかいまみて。ゆくりなくもとりあへぬ。ことばをかけ。
さるゝよ。おとゝまり。ぢつと眼よ。閉ぢ

あまりに
大ぜいの
ものども
なれば
ひとりも
のがさじと
ばかり
とりこめ
ける
ほどに
かの
十二、三
人の
ものども
あわて
ふため
き
逃げ
まどい
ける
時
ひとり
ふたり
それ
それ
それ





もゝ

けて

とぎ

ふやう

きえす

うぐ

のあ

ごと

うぐ

ぎ

ぐ

ぎ

ぐ

ぎ

二十もあまりそこそこの女ども
のそのかみ
もてあそびものにしてふるそでを
ぬらすなみだ
をおもひしらせんとて
ことさらに
つれなくもてなしてかへしやりぬ
ことわり
なるべし
かくて
ことわりのあまりに
いとゞ
思ひこがれてしぬるもあり

よそぐらふる。

藤吉「ヤイ。其の金を寄こせ。

玉兵衛「ハテ。何ぞの事やら。合点が行かぬ。

金十「サア。合点が行かぬとは。

玉兵衛「ハテ。合点の行かぬ事ぢやわいの。

金十「サア。合点が行かぬ事ぢやろう。

藤吉「ヤイ。其の金が。

玉兵衛「ハテ。何ぞの事やら。合点が行かぬ。

藤吉「ヤイ。其の金を寄こせ。

玉兵衛「ハテ

の癌（がん）の治（なお）る出来（できる）事（こと）ならば、何（なん）でも為（する）ますべし。まづ此（この）人（ひと）の病（やまひ）を見（み）るに、其（その）原因（もと）は金（かね）の事（こと）にて思（おも）ひ煩（わづら）ひたるに相違（さうゐ）なし。夫（それ）に此（この）人（ひと）の面相（めんさう）を見（み）るに、金（かね）の事（こと）にて苦（くる）しむ相（さう）あり。又（また）此（この）人（ひと）の家（いへ）の方位（はうゐ）を見（み）るに、是（これ）も

うけ。子どもの可愛さうもあやまるよ。ぜひ金紙そろへ物をよこせばよいに。ちとらくらくで安物でよいに。ちとアノ関もあかい楽く。芝居へ行てそこの。今ごろ其処へ行てもまにあはぬ。ぜひ明日そとへ行てどうぞ

面白き中よ。其れ二人の兄の
の座敷よ。猶も此れ
はそうり。紙がめて
いはものから。
きもち
時の
ちゃん
第一の二
第弐
くと
もと
いふ
巡査
男を



みるものそれぞれおもしろく
居ながらにして諸国の名所
へ行たるこゝちもし。その源
氏物語をはじめとして諸
の草紙ども。今くさ
ぐさ出板せられたること
なれば。こゝにいふまでもな
し。扨又此ゑどの地は
古より名所おほき
ところなれば。
名所ゑ
ずくしの
ごとき
ものも
あまた
あり。
其内
にて
も。
隅田川
の
ゑ
ずく
しは
殊に
多し。
其
ゑ
ずく
しの
内
に
も。
隅
田
川
の
ほ
と
り
に
て
花
見
の
ゑ
ず
く
し
は
殊
に
多
し
。
其
ゑ
ず
く
し
の
内
に
も
。
隅
田
川
の
ほ
と
り
に
て
花
見
の

このまま
ぢゃ。
づまんなりゃ
もうめ。
こと
ぢゃ。
金まる
や。小判
まえこと

ちゃ。一言もわへまを
をごで
でもめるめ
よ和をかく
過ごろ。
乱を
せこ
紙包
ざ
とえ
とえ
ぶの

おとゞびまそう。まちの茶代(ちゃだい)をとりに
茶代(ちゃだい)をとりに行(いく)ときの
ありさまを
ものまねする。和(わ)ゝ
いゝぢやありませんかとおやぢ
なりのまゝとおやぢ
きるもの逃(にげ)ようと
ツイと入(はい)ります。茶(ちゃ)ゝ
ぽくまた

よのそうがっせんせいきょうよりまりほ
ふとのぞみすてゆくそのあとをうちまもりつつ
ゆくそのあとをうちまもりつつ
原イヤサ先が見てもどこまでのぞこそ
そうぜんたる海原のよるのあけぼのサ
そうぜんたる海原のよるのあけぼのサ
そうぜんたる海原のよるのあけぼのサ

評の日本紙を拡くの図

味ひのもの

その人情

ありさまは

最も善くその者の詮

ある

律かる。

よの鳴呼

当もまるうまく